interview
インタビュー

当選後間もない柴山議員を衆議院議員会館に訪ね，弁護士４年目にして，公募により衆議院議員に立候補して当選した感想を伺った。

（聞き手：古椎庸文）

プロフィール　しばやま・まさひこ

1965年12月生まれ。所沢市に在住。1990年東大卒。不動産会社勤務を経て，2000年10月東弁入会（弁護士登録・53期）。2001年6月から当会広報委員会のLIBRA編集会議に所属，2003年度は副編集長として活躍。2004年4月の衆議院議員補欠選挙埼玉8区で初当選。現在，法務委員，憲法調査会委員や自民党広報局次長などを務める。

衆議院議員
東京弁護士会会員

柴山昌彦さん

――政治には，以前から興味があったのですか。

特に議員を志していたわけではありません。テレビで時事放談やサンデープロジェクトなどは見ていましたが，特定の政治信条などはなく，身内にも政治に関係ある者はいませんでしたから。ただ，大学の同級生で国会議員になった人がいて，その活動には注目していました。

――司法試験を受験していた頃は，何になろうと思っていたのですか。

弁護士になろうと思っていました。依頼者と直接，接することができるし，公務員ではないので，将来，選択の幅が広がるであろうと思ったからです。

――勤められていた事務所の仕事は，どういうものでしたか。

何でもやりましたが，民事事件，特に企業法務の仕事がメインでした。

――それが，政治家への道を選んだのは，どういうきっかけですか。

私は高校2年生のときから所沢市に20年以上住んでいて，地元の選挙を見てきたのですが，衆議院議員選挙では，これまで自民党の候補者が2回連続して惜敗しており，2003年末の総選挙でやっと当選したのです。ところがこの人が当選直後に公職選挙法違反の罪で逮捕され，本人が議員を辞職したのみならず，多くの地元の人々が処罰されてしまいました。私は，法律家として，自分の地元でこのような事件があったことが非常に残念でした。

――それと，ご自身が政治家になるということが，どのように結びついたのですか。

2004年になって間もなくでしたが，新聞を読んでいたら，自民党がこれまでの党の歴史の中で初めて全国公募を行ない，私の地元の埼玉8区で4月に実施される衆議院議員補欠選挙の候補者を選ぶという記事があったのです。その記事を読んだとき，雷に打たれたような感じがして「もう，これは自分が立つしかない」と思ったのです。

――どうしてですか。

まず1つは，日本の政治が変わるきっかけを，自分が作り出せるのでないかと思ったのです。私は，それまで，自民党に対して，教育や憲法の議論でシンパシーを感じながらも，今回の事件でみられるような金権体質に反発を感じていましたし，自民党の国会議員には，いわゆる二世か，官僚か，地方議員か，業界団体の人がなるもの

で，それ以外の人はなれないというイメージを持っていました。しかし，この全国公募という自民党にとって初めての試みが，開かれた政党への第一歩となり得るのではないか，それで日本の政治が変わっていくのでないかと感じたのです。しかも，公職選挙法違反で前職が逮捕された直後の選挙ということなので，法律を知っている自分がふさわしいのではないかと思いました。

もう1つは，今回の選挙が実施されるのが自分の地元であって，自分が有利でないかと感じるとともに，地元にコンプライアンス（法令遵守）の風土を根付かせることができると思ったということもあります。

――選挙戦に突入したときの感じはどうでしたか。

最初は，有権者の反応は冷え切っていたという感じです。ビラ配りをしても，最初は，受け取ってくれないばかりか，「恥を知れ」というような中傷を受けたりしました。選挙をよく知る人達は，私が当選するはずがないと考えていたようです。

ところが，自転車キャンペーンやミニ集会，街頭演説などを通じて，ボランティアの人や若手の議員さん達と一緒になって自分の想いを訴えていったところ，最後は，支持が波となって感じられるようになり，これは行けるのではないかという感じを持つようになりました。

――当選された感想はいかがですか。

本当に多くの人に助けられ，感謝の気持ちでいっぱいです。運がよかったと思います。国会議員は自分が思っていたより遥かに忙しいですね。

――話は戻りますが，立候補を決めたとき，ご家族には相談されましたか。

私は，2003年の11月に結婚したばかりですが，そのときは当然，立候補の意思などはなかったわけです。私が今回公募に応募すると聞いて，妻はひっくり返っていました（笑）。どうせ候補者になんかなれないから好きなようにさせてくれと説得しました。子供がいたら，とても立候補に踏み切れなかったと思います。

――勤めていた事務所には，事前に相談されたのですか。

2月中旬に応募したのですが，応募者が80名を超えており，自分が選ばれるという自信が持てなかったものですから，同僚との関係などを考えて相談はしませんでした。その後，3月に入って，突然，携帯電話に連絡があり，「最終面接の6人に選ばれたので，党本部にこれこれの日に来てください」と言われたのです。この時点でも，選ばれるかどうかがまったく分からなかったので，説明はできませんでした。ところが，面接後その日のうちに私に決まったと言われ，その翌日から，すぐに記者会見，立候補に向けた準備となってしまったので，結局，事務所への連絡は候補者決定の日の夜，記者会見の前日となり，事務所の人達には大変な迷惑をかける結果となってしまいました。本当に申し訳なかったと思っています。

――弁護士時代はLIBRAの副編集長をされていましたが，印象に残っていることは？

広報委員会に入ったところ，編集部の人手が足りないと聞いて，弁護士の活動を対外的にアピールして弁護士業務の拡大に役立ちたいと思って編集の仕事をしていました。弁護士に役立つ特集を数多く掲載できたことや，お父さんが弁護士である女優の竹下景子さんにインタビューできたことなどが印象に残っています。

――外から見た弁護士会の活動については，どのように思われますか。

かつての弁護士会のスタンスとは異なり，最近は，国民に身近な司法に意を配り，提言が現実的になってきているように思えて，共感を覚えます。

――今後の抱負は？

問題は山積していますが，将来の日本を担う若い人のために，よりよい日本を作っていかなければならないと思います。特に，教育現場の荒廃の問題は大きく，これを真剣に議論すべきであると考えています。また，一連の司法改革に魂を入れるとともに，真に公正な市場ルールを作っていくのに役立てればと思います。政治の場では，どちらかというと非論理的な部分で結論が決まってしまうようなイメージがありますが，だからこそ，問題分析の手法等，弁護士としての経験は国会の議論で生かせるものが多くあると信じています。

（構成：古椎 庸文）

弁護士としての経験は国会の議論で生かせるものが多くある。司法改革に魂を入れ、公正な市場ルール作りに役立てればと。